
ペルソナ3なんとなく書いてみた

闇のロマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3なんとなく書いてみた

【Nコード】

N1207Z

【作者名】

闇のロマン

【あらすじ】

私の他作品、Fateなんとなく書いてみたの主人公、衛宮退を主人公としたペルソナ3のハーレムになるかも？な作品です。Fateもクロスしていきます。

TSしようかな？Fateの方はそういう作品ですし。

まあそれは追追考えていきます。

原作主人公はハム子です。

また、この作品はFateなんとなく書いてみたを読んで頂けない

と理解できないであろうと思われます。よろしければご一読ください。

第一話（前書き）

またやっちゃったけど

後悔はない。

自由意思は・・・俺にある！

第一話

俺、衛宮退は電車に乗っていた。

いつの間にか、理由は定かではないが乗っていた。ポーンと機内放送の音になる。

「次はく巖戸台、巖戸台――」

巖戸台、聞いたことのない地名だった。

いや、知らないだけで実際存在していたのかもしれないが、そんなことはどうでもいい。

何故俺はそんな所行きの電車に乗っているんだ。

訳が分からない。どうなっている？

俺はこうなった理由は無いものかと思考を巡らせる。

『退！とうとう第二魔法に到達したかもしれないわ！実験に付き合
ってちょうだい！』

『・・・はあ？』

そう、俺は結局凜に押し切られて実験に付き合わされたんだ。

そして、何かされた直後意識を失って・・・。

現状に至る・・・と。

成程、つまりこれはそういうことかと俺は納得する。

「凜のいつものうっかりか・・・全くあれはもはや呪いだな」

俺は思わず深い溜息を吐いた。

「あの、そんなに深く溜息を吐いてどうしたんですか・・・？」

その時、あまりに深い溜息だったのかやや心配そうな声色で声を掛けられた。

声の主は隣に座っていた少女だった。黒い学生服だろうか？を身に纏い、茶色の髪を何個かのピンで止めた赤い瞳を持つ少女だ。

いけないな、見ず知らずの他人に心配をかけてしまうとは・・・。

「すまない、友人のせいで少々面倒な目にあってしまったね。つい溜息なぞ吐いてしまった。心配してくれてありがとう」

「いえ、大丈夫なら良かったです。あ、私、主人^{ぬしびと} 公子^{きみこ}って言います。貴方は？」

「俺は衛宮退。そろそろ三十路のただのおっさんだよ」

言っておくが無職ではない。

ちゃんと死徒討伐とか要人の護衛などやっている。

稀に式や美樹ちゃんなんかも手伝ってくれる。

式は護衛で、美樹ちゃんは搜索系の仕事で一役買ってくれている。

「衛宮さん、ですか。よろしく願いします！年齢よりずっとお若いんですね」

「宜しく願います。見たところ学生だが礼儀正しいな。そういう娘は俺の周りには少なくてな。何だか新鮮だよ」

そう、白は家族だからいいとして、椎名・綾子ちゃん・式・ランサーとまだまだいるが割りと大人しめの娘というのは周りにいなかった。

明朗快活、猪突猛進なヤツが多かったため、こういう娘は新鮮だ。それに若いって・・・嬉しいことを言ってくれる。

刹那、またポーンと音が鳴る。

「あ、着きましたね。じゃあ私巖戸台で降りますんで・・・また会えるといいですね！」

そういつて主人さんは降りていった。

とりあえず俺も巖戸台で降りてみることにしよう。

無論券など持っている訳がないので、券を紛失したと偽って券を購入する羽目になった。

そして即改札で使うという・・・何だか虚しかった。

改札口に券を入れ、とりあえず駅から出ようとした刹那。

音が消えた。

電気の付いていたものも何もかも、見てみるとどうやら俺の携帯電話や腕時計も止まっているようだった。故障かとも思ったがそれにしては出来すぎている。

何が起こっているんだ？

とにかく事態を把握しようと駅を出ると、そこには・・・まるで棺桶のようなオブジェがいくつも置かれていた。

それに何かの気配がする。

殺気も感じる。それも複数、だが雰囲気的にはそう強くはない。

だが油断は禁物だ。俺は何故か手にしていた刀を抜き、辺りを警戒する。

そして、殺気が濃厚なものとなる。

「・・・来るか！」

正面に何体だろうか、何かが躍り出てくる。

それは・・・。

黒い、形容し難い造形の化け物だった。

「…！？ 何だこいつは、あまり脅威になるほどの力はないようだが…多いな、幾らなんでも」

俺の周りにはうごうごと沢山の黒い影、これだけ多いと正直萎える。さすがに気持ちも悪い。

片手で相手するにはキツイかもな、この数は。

まあ、無い物ねだりをして仕方がない。

「伊達に聖杯戦争を生き延びてないってことを教えてやるよ。お前らに言葉が理解できてるか知らないがな」

刹那、多くの影の中から数体が襲いかかってくる。

しかしやはりというべきか連携が取れておらず、バラバラに襲いかかってくる影を順番に両断していく。

だが何十体が倒したところで影らも学習したのか、何体か同時に連携をとって襲ってくるようになる。

正面から一体が来る。そしてその影に隠れてもう一体が俺の足に纏わり付いてくる。

「糞が…気持ち悪いんだよ!」

俺は一度正面から来た方の影を刀で受け止め、足に纏わり付いた影を足に纏わり付かせたまま思い切り持ち上げ、もう一体と一緒に思い切り踵落としを食らわせ地面に叩きつける。

俺が二体を始末したと同時に影の群れの中から氷や炎、風に雷——五属性の魔術だろうか?——が飛来してくる。それらを俺は体をずらし、時には屈み、やり過ごしていく。

「…キリがないな全く」

キリがない。全くその通り、地道に刀や体術で倒しているが全く減らない。

何故これほどまでに多いのだろうか? 厄日か? 厄日なのか?

…厄日だろうな。凜ちゃんに変な所に飛ばされるくらいだし。

しかし、どうしたものか。

俺の体力に余裕はあるが無限じゃない。

何か打開策が欲しい。こんなときに白の投影魔術や凜のガンドとかが羨ましく感じる。

刹那、意識を飛ばしてしまっていたために俺は影が背後から来ていることに気が付かなかった。

「…!?!? しまつ…ぐあ…!!」

俺は見事に地面に組み伏せられてしまう。

何体もの影も寄ってきて俺を拘束する。

何て…無様、戦闘中に油断してこの様なんて馬鹿か!

徐々に徐々に死が近づいてくるのを感じる。

身体は全く動かせない。

どうする? 諦めるのか?

そんな訳がない。

まだ白の、妹の花嫁衣装すら見てないんだぞ。

我が妹や、椎名、凜。あの娘らの幸せを見届けるまでは死ねるか! 兄ちゃんを嘗めんなよ!

「うおおおおおおおおお!!」

刹那、脳裏に言葉が浮かぶ。

ペ……………ナ。

ペ……………ソナ。

『さあ、私を呼べ。深愛なる我があ…夫よ』

何か変なの聞こえた！

「ペルソナ！」

そう脳裏に響いた言葉を叫ぶ。

すると突如目の前に現れたカードが弾け、青い光が俺を包む、と同時に俺を拘束していた影が一気に消し飛んだ。

何が起こったのかと周りを見ると、周辺にうごうご蠢いていた筈の大量の影の姿も消えていた。

「一体何が…」

辺りを見回す…！？

視界の端に何かツンツンした白髪と赤い外装が見えた…。

そんな訳…ないはずだ。

だって此処が俺が知らなかっただけで存在していたとしても冬木市にいる筈の赤い弓兵がここにいるはずないじゃないか！

「ふむ、やはり退と私はどこまでも深く繋がっているようだな。君の召喚に従い参上した」

そこには間違いなく赤い弓兵、クラスはアーチャー。

聖杯戦争の参加者の、真名は『エミヤ シロ』がニコニコ笑いながら立っていた。

つまり…どうということなんだ？

第一話（後書き）

はい、というわけで主人公は聖杯戦争から数年後の衛宮退三十路前
さんです。

相変わらず片腕なし。一話では散々でしたが実際はもっと強い、強
くなっています。

ではよろしく願います。

第二話（前書き）

ただでさえ崩壊しているアーチャーさらに崩壊

第二話

結局、目の前にいるシロ、いやアーチャーは幻覚ではなかった…。アーチャーは相変わらず変た：ブラコンのようだった。慕われているのは純粹に嬉しくはあるのだが。

「それで、どういうことなんだ。なんで俺は気がいたら電車に乗ってたんだ」

「ふむ、まあ、第二魔法を実現した：のだろうな、恐らく」

「成功したばかりに俺は平行世界なんぞに放り出されたのか、というか凜は何してくれてるんだ。第二魔法を了承なしにやる奴があるか」

「ふっ、甘いな退」

俺が凜の行為に頭を抱えていると、アーチャーはフツと笑う。それはそんなこともわからないのかと俺を嘲笑っているかの如くだ。

「凜も本当に実験のつもりで事を成すつもりはなかったのだろう、つまりは：ただの『うっかり』だ」

「：ですよねー」

わかってはいたが遠坂の家はとんでもない呪いを残してくれたものだ。というかあの子のうっかりは魔法にすら届いてしまうのか。

なんて恐ろしい…ゲイボルク以上の呪いに違いない。

「しかしどうするか、こちらに戸籍があるかも疑わしいが…家もないし」

「そうだな、戸籍の方は私が調べておこう。霊体化すれば潜入して調べるくらい造作もない」

それは犯罪だろうアーチャー。

だが俺が直接危機に言って万が一戸籍がなければ…俺は色々やバイことになる可能性がある。

ここはアーチャーに任せるほかあるまい。

俺はアーチャーに出来るだけ早めに頼むようお願いする。

アーチャーは了解し、頷くと姿を消した。

「…あ、なんでいるのか聞き忘れてた」

時既に遅し、である。

だが正直アーチャーが何故いるかなど心底どうでもいいので放置しておくことにした。

とりあえずは寢床を探さなければ。

見たところ街並みは日本だし、探せばどこか滞在出来る場所があるだろう。

…がしかしそう上手くはいかないのが世の常というもので…。

俺はどこかの神社の前でベンチに座って俯き冷たい風に晒されながら黄昏ていた。

「畜生：どこもなかった、何で今日に限ってどこも改装中なんだ。
世界の修正力とでも言うつもりかこの野郎め：」

「わふ？」

：わふ？

俯いていた顔を上げる。

そこには白い犬が一匹。

可愛らしいが理性を感じさせる精悍な顔付きをしている。

「お前、飼い主はどうした？」

俺は返事は期待せず、犬の前に屈んで頭を撫でながら問うた。

「わん！」

：返事が帰ってくるとは思わなかったな。

この神社の神主さんか何かが飼い主だろうか。

それにしても神社内に気配がない。寝ていたとしても少なからず気配はするはずだし、別に家があるのならこの犬はそちらに連れられているはずだ。

「もしかして、お前：一人か？」

「くうん：」

俺がそう聞くと、犬は悲しげに鳴いた。

そうか、こいつは一人なのか。

きつと何故ここにいるのかは分からないが、何か思うところがあつてここにいるのだろう。

しかし、この反応もしかして。

「お前。俺の言ってることがわかるのか？」

「わんっ！」

犬は元気よく一声鳴く。

本当に分かっているようだった。

もしかしてこの世界の犬は皆こうなのだろうか…。

驚くべき世界だな…。

「寒いが今日はこのベンチで寝るしかないか…。ああ、そうだな…」

俺は犬の方へ目を向ける。

犬はどうしたのかと首を傾げた。

「今日だけでいい。お前を抱いて寝かせてくれないか？寒くてな」

俺はそんなお願いをした自分自身に苦笑しつつ犬に向かって言った。

犬はそんな俺に間髪いれずに飛びかかってくる。

俺はそんな犬の行為に一瞬驚いたが、何とか受け止める。

「良いつてことか？」

「わんっ、わんっ！」

犬は肯定するように二度吠えた。

俺は犬をぎゅっと抱きしめる。

暖かい。この世界に来て初めて感じる温もりがまさか犬だとは思わなかった。

求めてやまなかった温もり安心してしまったのか目蓋が重くなってくる。

「…おやすみ、犬」

意識が落ちる。

おまけ

「戻ったぞ退…ってこ、これは!？」

「くー、くー」「わふっ、くうーん」

「もふもふと退の寝顔のツーショット!これは…固有結界に保存しないと!はあ…はあ…あ、鼻血」

「う、ん…うるさいぞランサー…静かに寝かせろ…グー」

「…!?!? 寝言があたしじゃなくてあんな犬だなんて…絶望した、けどそれとこれとは別ね」

I am the born of my brother!!!!!!

第二話（後書き）

アチャ子は変態。

ここではこれはジャステイス！

第三話 4月7日（前書き）

少し自分で書いてて混乱しちゃったのでおかしな部分があるかもです。

まあスルーしていただけると助かります。

第三話 4月7日

「まず結論から言おう、戸籍はあった。何故か退は元々この世界に
いるようになっていたのか……。良い方向に修正力でも働いたの
か」

朝起きると、ベンチの前は血だらけ。

目の前にいるアーチャーは鼻にティッシュを入れていた。

美人が台無し過ぎる。

「とりあえず第一の問題は突破出来たってことか。後は……。住居
と仕事をどうするかだな」

財布に幾らか金はあるが長持ちはすまい。

となると……。住居を得ることが出来て、尚且つそれが仕事にもな
るもの。

つまり、住み込みで出来る仕事を見つけられるのがベストだろう。

「とはいえ……。だ。」

そんなもの直ぐに思い当たるものではなかった。

とりあえず街を散策してみることにし、一夜を共にした犬に別れを
告げ、俺は神社を後にした。

数十分程歩いたところで俺は気になることがあり、路地裏へ入り隣

で霊体化して付いてきているアーチャーに声を掛ける。

「アーチャー、少しいいか？ お前呼ばれたのはいいが魔力はどうした。まさか昨日お前を読んでから妙に魔力を吸われている気がするの俺の気のせいかな？」

「それは気のせいではない。退に召喚されている間はパスが繋がっているのだろう。つまりこのまま私を召喚したままなのはあまり得策ではない。」

そう言ってアーチャーは霊体化を解く。

そう、俺はあまり魔力量がない。だが身体強化にその少ない魔力を使っているためアーチャーを使役しつつ戦うなんて出来ないだろう。戦わなければ何日か召喚したままでいられるだろうが。

「しかし、もう一度召喚出来る保証が無い以上アーチャーを消すのは少しな…」

「そう言ってもらえるのは猛烈に嬉しいのだが問題ない。」

そう言ってアーチャーは目を静かに閉じる。

するとアーチャーが光に包まれて消え、一枚のカードが残った。

「き、消えた？」

アーチャーが消えたことに胆を冷やすが、とにかく落ちているカードを拾う。

そこにはアーチャーの姿が書かれている。

『どうだ？退』

「これは…念話か」

俺の頭にアーチャーの声が響きわたる。

『どうやら退が魔力消費を最低限に出来るようにカード化出来るようになったっているようだ。自由に動けず多少不便だがマスターの負担を和らげるためだ。受け入れよう』

「アーチャー…」

『その代わり今夜一緒に寝「よし職探しするかー」いけずだな退』

「あつた、あつたよ住み込みの仕事」

それはとある建物の壁に貼ってあつた張り紙に記載されていた。

内容は月光館学園——昨日出会った主人さんの通うらしい学校——の寮母、または寮父を募集しているものだった。しかも面接のみ。俺はこのチャンス逃してなるものかと思った。毎日寮生に食事を作り、寮の掃除をしたりしなければならぬが、そういうのは大得意だ。

何せ白がまだ未熟だった頃ずっと家事をして、白に家事を教えたのも俺なのだ。

これは・・・行くしかない。

どうやら期限も迫っているらしい。

「期限は・・・四月七日・・・今日じゃないか！」

『ふむ、相当ギリギリだな』

だ、大丈夫だよな？

もうこれ採用決まっちゃいそうなレベルの時期なのでは・・・。

いや、希望は最後まで捨ててはダメだと、俺は早速俺はチラシに書かれてある番号に電話を掛けた。

月光館学園の一室で面接を受けることになった。

結果は・・・面接もそこに即採用だった。そんなんでいいのか
月光館学園。

面接相手の理事長——幾月修司さん——の話では面接を受けに来ていた人たちが、全員無気力症なる病気にかかってしまい使い物にならなくなってしまったのだそうだ。無気力症というのはよくわからないが、住み込みの仕事を得られたのは僥倖だった。

「えっと：今日の十九時に寮へ行って早速仕事：か。なんか急過ぎるしあまりにスムーズに事が進み過ぎていて裏がありそうで怖いが：背に腹は変えられんしな」

「まさか寮母、父募集がこんな形で実を結ぶとはね…」

月光館学園学生寮の最上階の一室、そこに幾月修司はいた。幾月は部屋に設置されているモニターを見ていた。

そこに写っているのは刀を振るい猛然と影——シャドウ——を蹴散らす退の姿だ。

「ふむ、大量のシャドウ反応が出ては消えてを繰り返していたから桐条くんに調査して貰ったんだけど、まさかこんな存在を見つけることができるとはね」

映像は途中で幾月のいう桐条くんがシャドウに遭遇してしまった為に途中で切れてしまっているが、退の実力を知るには十分過ぎた。

「ふふふ、まさかこの青年が募集に食いついてくるとは思わなかったよ。しかしそのおかげでこんな使えそうなコマを労せず呼び込むことが出来た…。彼を計画に入れば更に私の計画が成就する確立は上がる…くっくっ、ははははははは」

「さて、そろそろ十八時半か。初めて行く場所だし早めに行くところだよ」

『ああ』

俺は幾月さんから面接の際に貰った地図を片手に学生寮へ向かう。初めての街は地図があってもかなり大変だった。

しかし、俺は丁度一九時頃に学生寮の前に付いていた。
俺はこれからお世話していく子達に会うのに少し緊張しつつ服を少し整える。

「…よし！」

そして一息入れ、俺は寮の扉を開けた。

第三話 4月7日（後書き）

退、寮父になる。

幾月、怪しげ。

今回はこんなところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1207z/>

ペルソナ3なんとなく書いてみた

2011年12月10日23時50分発行